

奥さん。ちよいと申し上げます。わたくしは御存じの無いものですが、こちらでは御身分を好く存じてゐます。

わたくしの考では、あなたは今あぶない目にお逢になります。

卑しいものの申す事をお聴なされる思召がおありなされるなら、

ここにさうして入らつしやらずに、早くそのお子様を、連れてお逃なさいまし。

こんな事を申してびつくりおさせ申すのは、残酷だとわたくしも思ひます。

併しもつとひどい目にお逢せ申すのは、一層残酷ですからね。

なんにしる急な場合ですから。そんなら御機嫌好う。

わたくしも長居は出来ません。

(退場)

マクダツフ夫人

まあ、ごこへわたしが逃げられよう。

それになんにも悪い事もしないのに。だがほんにさうぢや。わたしのゐる此世界では、悪い事をする人がごうかすると褒められて、善い事をする人が随分あぶない愚^{おろか}な目に逢ふ。ああ、ごうした事だらう。わたしは悪い事をしないなんぞと、そんな女の分^{いひわけ}疏を言つたつてなんにならう。おや、まあ、なんと云ふ人達だらう。

(刺客登場)

刺客

主人はどこにゐる。

マクダツフ夫人

さうね。お前さん達なぞに見附かるやうな、

そんな穢^{けが}らしい所へは往つてゐますまい。

マクダツフ夫人

刺客

主人は不義者だぞ。

倅

お前嘘衝ね。毛のくしゃくした厭な人。

刺客

なんだぞ。卵奴が。

(刺す。)

謀叛人の片割だ。

倅

あら、わたしを殺すわ。母あ様。

お逃よう。早く。

(死す。マクダツフ夫人「人殺」と叫びて逃ぐ。)

刺客等追ひ行く。)

第三場 イングランド。王宮の前。

マルコムとマクダツフと登場。

マルコム

いや。お互にどこかの寂しい物陰を捜して、そこへ往つて

悲しい胸の透くまで泣かうぢやありませんか。

マクダツフ

人を殺す刀の柄をしっかりと握らうではありませんか。そして

立派に男らしく、失墜した相續權を取り返させう。今の所では

マクダツフ

毎日夜が明ければ、後家が泣く。孤が泣く。毎日憂愁が
天の面を打つて、天に反響する。
天も我スコットランドと俱に憂へて、同じ悲痛の
聲を揚げるのです。

マルコム

いや。わたしは知つてゐる丈の事を信じ、
信じてゐる丈の事を歎き、この手で好くせられる丈の事は、
時の利が得られ次第に好くするでせう。
それはあなたの言つた事は、或は其通かも知れぬ。
あの暴君だが、口に名を稱へた丈で舌の爛れさうなあの男も、
最初は誠實らしう見えた。あなたも敬愛してゐられたのです。
まだあの男があなたには手を着けぬ。わたしは年若で役に立たぬが、

あなたがあの男に功を立てようとなさるなら、随分役に立つかも知れぬ。
怒れる神の威を霽さうとして、弱い、不便な、罪の無い羊を屠るのも、
智者の行でせうから。

マクダツフ

わたくしは不義はしません。

マルコム

でもマクベスはします。

善良な、徳のある性分の人も、帝王の命の前には
節を屈することがありますからね。いや。ごうぞ御容赦を願ひます。
あなたがごんな方だと云ふことは、わたしがごう思つても變りはしません。
天使は必ず清いのです。一番清い天使は墮ちたにしても。
よしやあらゆる悪なる物が慈愛の面を装うても、

マクベス

慈愛は必ずあなたのやうでなくてはなりません。

マクダツフ

ああ。わたくしは希望を失ひました。

マルコム

いや。あなたの希望を失はれた場所が、わたしの懷疑を捨てた場所かも知れません。なせあなたは無慙にも妻子を棄てました。

(人情の貴い機微、慈愛の強い羈絆であるに。)

別も告げずにお立になつたのですつてね。どうぞわたしの疑つたのを、わたしに辱められたやうにはお取下さるな。

これは用心に過ぎないのですから。わたしにどう思はれたつて、あなたの誠實は傷けられませんから。

マクダツフ

ああ。不便ながら本國は血を流すが好い。

暴虐の政治。貴様は望通に基礎を固めろ。

もう忠誠が貴様の我儘を食ひ止めることは出来ぬ。邪曲を見せびらかせ。

僞朝の王位は認められたのだ。○殿下。お暇いたします。

わたくしなどは、あの暴君の掌握に歸してゐる全版圖に、

富饒な東國をも添へて貰ふにしても、あなたの思召すやうな

悪人にはなりたくありません。

マルコム

いやどうぞおこつて下さるな。

わたしもあなたに對してむやみに猜疑心を懷いてかう云ふのではありません。

わたしにも本國が軛の下に喘いでゐると云ふことは分かつてゐます。

本國は泣いてゐよう。血を流してゐよう。古創の上に毎日

マクベス

新しい劊を受けてゐよう。そればかりでは無い。かう云ふ事も分かつてゐます。

本國にもわたしの相續權のために臂を揮つてくれる人もあらう。

又この親切なイングランドからも立派に幾千の兵の供給が得られよう。

併しこれが總てさうなるとした所で、假にわたしが成功して

あの暴君の頭を脚下に踏み付け、

乃至それをわたしの刀の尖に刺し貫いたとしても、

矢張不便な本國は前にも増した罪惡を負うてゐることになりませう。

繼いで起つた新しい王のために、前よりも多方面に、

苦痛を受けることになりませう。

マクダツフ

その新しい王とは誰でございます。

マルコム



それはわたしの事です。わたしは自知の明があるが、

わたしには罪惡の特殊な性質が根強く種々附けられてゐて、

それが世上に現れたら、あの黒いマクベスが

却つて雪のやうに白く見えるでせう。そして氣の毒な國家は

わたしの途方もない罪惡に比べて見て、マクベスが無邪氣な

羊のやうに思ふでせう。

マクダツフ

でも恐ろしい地獄の群にだつて、

マクベスの上を越す罪惡で咀はれてゐる

惡魔はなささうなものです。

マルコム

それはわたしの認めてゐる所でも、

マクベス

あれは殺戮が好で、姪亂で、吝嗇で、邪曲で、奸諂で、
 亂暴で、意地が悪くて、凡そ名の附けられる程の
 罪惡の味にする男です。併しね、底の知れないのは
 わたしの好色ですよ。あなた方の女房、娘、

仲働、女中、それ等皆でもわたしの惑溺の
 器を充たすには足りません。わたしの慾望は、
 意志にあらがはうとするあらゆる制限的障礙を
 排せずには置けません。こんな男に國を治めさせるよりは
 マクベスの方が好いでせう。

マクダツフ

なる程際限の無い不檢束を

天賦として持つてゐるのも暴虐でございませう。

それがめでたい玉座に時ならぬ不祥を及ぼして、
 幾多の帝王を滅したこともあります。併しさうだからと云つて、
 あなたがお受になる筈の物をお受になるに、なんの憚りがあるませう。
 立派に有り餘る程の快樂をお盡になりながら、
 表向は冷かにお見せかけなされて、時代の目をお匿なさいまし。
 喜んで思召に従ふ女は幾らもあります。思召があること見て、
 殿下に自ら薦めようとする丈の女をでも、
 悉く鶉呑になさる程の色慾の角鷹が
 お胸に舍つてゐようとは、わたくしには思はれませんが。

マルコム

そればかりなら好いが、

飽くまで不幸に組み立てられたわたしの性癖のうちには、

厭くことを知らない吝嗇がある。若し國王になつたら、

わたしは貴族共の領地を取り上げるかも知れぬ。

何某の財物、誰某の第宅に望を繋げるかも知れぬ。

そして所有物の殖えるのが薬味になつて、

わたしの貪婪は愈盛んになるかも知れぬ。

わたしは國中の善人や正直者を相手にして、その富を奪ふために、

不正な争を起すかも知れぬ。

マクタツフ

さあ。楽しくて短い夏に似た

色慾よりは、此慾の方が悪い根を卸して生えて、

人の性分の深い處まで這入つてゐますね。これは古來滅亡した

帝王のためには、身を截る刃でございました。だが、まあ、御心配なさいますな。

スコットランドにはあなたの御自分の物で、あなたの慾望を

お充たしになる丈の富があります。總てそんな事は、

他の方面の徳義でお填合になれば、我慢が出来ます。

マルコム

その徳義がわたしにはありません。あの王者の徳と云ふものですね。

公平、誠實、寡慾だの、終始一貫だの、

温和、忍耐、慈悲、謙遜だの、

敬虔、寛恕、豪邁、勇悍だのと云ふものには、

わたしは趣味を持つてゐません。それとは反對に、

わたしはあらゆる罪惡の使分つかひわけで胸が一ぱいになつてゐて、

又それをいろ／＼に實行しても見るのです。まあ、わたしが權威を得たら、

和合の甘い乳ちぢを地獄へ傾け棄て、

マクマス

二〇三

社會の安寧を掻き亂し、地上の一切の統一を破壊するでせう。

マクダツフ

あゝ。スコットランド。スコットランド。

マルコム

ごうです。かう云ふ男が國を治めるに適するでせうか。御意見を言つて下さい。わたしの性質は言つた通です。

マクダツフ

治めるに適するかと

云ふのですか。そんな人は生きてゐるにも適しません。あゝ。不便な國民だ。今は篡立した暴君の血腥い令の杖で支配せられてゐて、いつになつたら再び太平の口を見るだらう。



お前達の戴く玉座の眞の跡繼は

自分で自分を咀ふ宣告を下して、

我家の血統を瀆してゐられるのだからな。○あなたの父王は

極めて神聖な君主でございました。あなたをお生になつた妃は、

(立つてお出になるよりは、跪いてお出になることが多かつた位の方で、)

口ごとに身をお棄になるやうな精進をなされた。いや。お暇いたします。

あなたが御自分の性質としてお並になつた、その罪惡が厭さに、

わたくしはスコットランドを立ち退いたのでございます。○あゝ。己の胸。

貴様の望はこゝに絶えた。

マルコム

マクダツフ。待つて下さい。

あなたのその純潔から生れた、高尚な熱情が、わたしの靈の上から

疑惑の暈を拭ひ取つて、わたしの心をあなたの忠誠、

あなたの公明正大に傾かせました。あの悪魔のやうなマクベスが種々の奸計を逞うして、わたしを自分の権力の下に

羅致しようと思ひましたので、わたしは始終控目な智略で、輕卒な舉動を避けてゐました。だが、さあ、天にいます神に

あなたとわたしとの間に立つてお貰申さう。今からは

わたしは自分をあなたの指圖の下もとに置いて、

さつきの自暴自棄の詞を取り消します。わたしは此場で

さつきわたしの身の上に附會した不徳や恥辱を取り除けます。

あれは皆わたしの性分に無い事柄です。わたしはまだ

女の肌を知りません。曾て偽の誓をしたことがありません。

殆ど自分の物をも欲しがつたことがありません。

一度も約束を反故にしたことがありません。

悪魔を悪魔にでも賣つたことがありません。

わたしは眞實を性命よりも愛してゐます。

わたしの生れて始めての嘘が、あの自暴自棄の詞でした。

この眞實のわたしを、あなたと不便な本國とに捧げます。

實はその本國へは、あなたのこゝへ來られる前に、

老將軍シワアドが一萬の兵を

そつくり爲立て、引率して立つてくれた。

さあ、一しよに跡から續きませう。正義の軍いくさに

勝利は得られさうなものです。なせあなたは黙つてゐますか。

マクダツフ

は。こんな結構な事と忌はしい事とが一時に來ては、

すぐには胸のをさまりが付きません。

(醫師登場。)

マルコム

いかにも。猶跡でいろく。(醫師に。)どうです。陛下はおでましですか。

醫師

はい。おでましになります。陛下に直して戴かうと思つて待つてゐる

一群の不幸な人民がゐますのです。その人達の病氣には

醫道の大試金石も徒事たづねごとになるのです。でも陛下がお障になると、

皆すぐに直ります。それ程の神聖な力を、天が陛下のお手に

お授申さづけしたのですから。

マルコム

いや。難有う。(醫師退場。)

マウタツフ

今の話の病氣とはどんな病氣でございます。

マルコム

瘰癧しゅじです。

それをお直しになるのが、あの善良な陛下のせられる一番不思議な

お爲事です。わたしも此イングラントに来てゐるやうになつてから、

度々それをなさるのを見ました。どうして天にねだるが好いかと云ふことは、

陛下御自身が一番好く御存じです。兎に角異様な症に

取り附かれた人民で、見るも哀な腫物しゅぶつや潰瘍くわいやうの出来たのを、

醫者の全く絶望した場合にも、陛下はお直しになります。

金のメダルを病人の項にお掛させなすつて、

御符ごふうをお渡になります。人の話に、

マクベス

さう云ふ人を直す力を、遺傳で王室の子孫にお傳になるのださうです。この不思議な御性分と一しよに、陛下は豫言の力をも天から授けられてお出になつて、この玉座の上に降つてゐる、かう云ふ種々な祝福が天佑の保障を見せてゐるのです。

マクダツフ

御覽なさい。そこに來る人を。

マルコム

國の人です。だがまだ知つた人だとは云はれませんね。

(ロス登場。)

マクダツフ

や。好くこつちへ渡つて來たなあ。

マルコム

ふん。もう分かつた。矢つ張知つた人だ。あゝ。主よ。

どうぞお互の間を疎遠にする此障礙を早くお除下さい。

ロス

ア、メン。

マクダツフ

どうだ。スコットランドの様子は同じ事か。

ロス

いやはや。氣の毒な

國だなあ。殆ど自分で自分に愛想をつかしてゐるのだ。我々には母國である筈だが、母ではなうて慕だ。なんにも知らぬものでなくてはちつとも微笑むことの出來ぬ國だ。

マクダツフ

二一一

歎息も、呻吟も、叫喚も、それをするのが徒に空気をゆるする丈で、人には顧みられぬ國だ。激烈な悲哀が尋常の興奮に見える國だ。あの國では葬の鐘が鳴つても、殆ど誰が死んだのかと問ふものが無い。良民の性命が帽子に挿した花より早く萎れる。病み煩ふ暇も無く人が死ぬる。

マクダツフ

餘り上手に拵へたやうで、

その癖眞實過ぎた話だ。

マルコム

何か新しい悲惨な事がありましたか。

ロス

いや。もう一時間立つた話は話手の恥になる位でございます。

一分時に一つ宛新しい悲惨が生じますから。

マクダツフ

己の妻はさいどうしてゐるかな。

ロス

いや。お達者だ。

マクダツフ

己の子供等は。

ロス

皆達者だ。

マクダツフ

あいつ等の平和を暴君が打ち破りはしなかつたかな。

マクベス

ロス

いや。己の別れた時は無事でゐられた。

マクタツフ

そんなに詞の儉約をするなよ。どんな工合だつた。

ロス

己が随分荷の勝つた便たよりを持つて

こつちへ渡つて来る時、

元氣な連中が蹶起したと云ふ噂があつた。

己は暴君の隊が繰り出されるのを見たので、

噂が證據立てられたやうに思つた。

今が國難を拯ふ時期だ。殿下がスコットランドへ

お顔をお出しになれば、軍兵は幾らも寄ります。女も起つて戦ひます。

皆恐ろしい困厄を逃れたいのですから。

マルコム

いや。本國のものも

自ら慰めるが好い。我々はもう此土地を立つのだ。親切なイングランドは

老將軍シワアドに一萬の兵を附けて借してくれた。

今のクリスト教國にあれ程老年の將官もないが、

又あれ程勇猛な軍人もないのだ。

ロス

は。さう云ふ慰なぐさめになるお詞を

承つた場で、こちらからは同じ報せういの出來ぬのが残念でございます。○

己の持つて來た詞は、誰一人耳に留めるものゝ無い、寂しい境で

虚空に向かつて叫びたい詞だ。

マクベス

マクダツフ

誰に關係した事か。

一般に渡る事か。それとも誰か一人の胸にこたへる特別な歎か。

□ ス

それは素直な心を持ったものは、

誰も共に歎く事だが、主にお主一人の身の上だ。

マクダツフ

ふん。己の身の上なら、

どうぞ控目にせず、早く言つて聞せてくれ。

□ ス

そんならお主が耳に、永遠に己の舌を憎ませぬやうにしてくれ。これまで聞いたことの無い心苦しい聲を聞せんではならぬからな。

マクダツフ

ふん。そんなら分かつた。

□ ス

お主が城は奇襲を受けた。お主が妻子は無慙にも切りさいなまれた。その模様を話すのは、殺された、罪の無い鹿の子の群の上に、お主が屍を疊ねるやうなものだ。

マルコム

南無三寶。

こら。マクダツフ。そんなに帽を目深に被られるには及ばぬ。
歎を詞に表しなざるが好い。口に出さずにもる悲は、
重荷に艱む胸に残酷な呷を聞せて、さうく胸を裂けさせる。

マクダツフ

子供もか。

ロス

女房、子供、家來共まで、見當次第だ。

マクダツフ

それに己は遠くに来てゐなくてはならなんだか。妻もだなあ。

ロス

今云つた通だ。

マルコム

どうぞ自ら慰めて下さい。

この骨に徹へる歎を直す

大復讐の薬を、我々に拵へさせて下さい。

マクダツフ

あれは子の無い男だから、そんな事をする。○あの可哀い奴等を

皆か。皆とお主は云つたな。○ああ。地獄の角鷹奴。○皆か。

あの雛子共皆と、親鳥とが残酷な

一攫に。

マルコム

どうぞ男らしく我慢して下さい。

マクダツフ

我慢いたします。

併し矢張苦痛をも男らしく感せずにはゐられません。
 只わたくしのために大切な、あんな物がゐたと云ふ記念丈を、
 心に持つてゐるわけには行きません。○天は又それを冷眼に見て、
 哀な者の身方をしてはくれなんだのか。罪惡の盈ちたマクベス奴。
 あれ等が皆貴様のお蔭で殺されたのだ。ああ。己程やくざな人間は無い。
 あれ等の靈は、自分達になんの過あやまちも無く、己のぬかりで
 残酷な殺戮を受けた。此上は天があれ等に平和を與へてくれれば好いが。

マルコム

どうぞその苦痛をあなたの刀の砥石にして下さい。どうぞ悲哀を
 憤怒に變へて、氣分を鈍らせずに、興奮させて下さい。

マクダツフ

いや。目に婦女の涙を灑がせて、舌に大言莊語させることが、

わたくしには出来ないでございます。○とは云ふもの、天よ、
 どうぞ徒あだに過す時を縮めて下さい。早くあのスコットランドの怨敵をんてきと
 わたくしとを咫尺の間に相見えさせて下さい。わたくしの刃が
 あいつの體に届くやうに。それであいつが助かつたら、
 それは天だ。諦める外無い。

マルコム

おう。その調子は男らしくて好い。

さあ、一しよに陛下の所へ往きませう。軍隊はもう揃つてゐる。
 お暇乞をするより外に用事は無い。マクベスの運命は
 人の揺り落すのを待つ、熟した果こみです。そして神は
 それにお手をお借かしになるのです。あの男は今いまの間に
 好すきな事をして置くが好い。永眠の夜は永いから。(退場。)

第五幕

第一場 ダンシネエン。城内の一間。

醫師と侍女と登場。

醫師

わたしはもうこれで二晩御一しよに徹夜しますが、あなたのお話が本當だと云ふことはまだ分かりませんですね。その起きてお歩あふきになつたと云ふことは、一番近いのがいつでしたか。

侍女

それは國王陛下が戦地へお立になつた時でございますの。わたくしが見てゐますと、寢

臺からお起おきになつて、夜のお召をお着になつて、お卓つくみの抽斗せつとの鑰かぎをお開あけになりますの。でございます。それから紙をお出だしになつて、それを廣げて物をお書かきになつて、讀み返して御覽ごらんになつて、封をなさいました。それから又寢臺へお歸かへになつて、お休やすみになりましたの。それが初はつからしまひまで、すつかり眠ねつた儘で遊あそばしたのでございますよ。

醫師

なんにしろひごく常軌を逸してゐるぞ。睡眠の恩澤にお浴あびしになると同時に、醒めた時の働いそぎをもなさると云ふのだからな。○所で眠ねつてゐてお動うごくなる間に、歩あいたり、何か爲事わざをしたりなさるのは別べつとして、あなたお妃きが何か仰おほやるのをお聞きなすつたことはございせんか。

侍女

それは伺うかがひましたが、お話申ますことは出来ませんの。

醫師

マッヘス

わたくしに宜しいですよ。それはあなた仰やつた方が宜しいですよ。

侍女

どうもあなたにも外の方にもお話申されませんわ。わたくし一人で伺つた事で、むづかしくなつた時、誰も證人になつてくれるものがございませんから。あ。御覽なさいまし。あすこを出てお出遊いたします。

(妃燭を乗りて登場。)

あれがそつくりいつもの御様子でございますの。わたくしお受合いたしますが、あれで好くお眠ねむりになつて入らつしやいますの。氣を着けて御覽なさいましよ。こちらへお避まげになつて。

醫師

どうしてあの手燭がお手に入つたのでせう。

侍女

それですか。お側にございましたのですわ。始終明あかりはお放はななさいませんの。さう云ふお言いひ附つけで。

醫師

あれを御覽なさい。お目を開あいてお出になりますね。

侍女

えい。でも何もお分かりにはなりませんの。

醫師

あ。あれは何をなさるのでせう。御覽なさい。あんなにお手をこすつてお出になるのですが。

侍女

あれはお妃様の不斷のお癖で入らつしやいますの。あのお手をお洗遊ばすやうなのが十五分もあんなにして入らつしやるのをお見上申したことがございますわ。

妃

あ。まだここに暈があるわ。

醫師

あ。お聞なさい。何か仰やる。好く覺えて置かなくてはならぬから、仰やる事を皆書き留めて置かう。

妃

厭な暈だこと。取れないかしら。えい。まだ取れないかしら。○おや。一つ。二つ。二時だわ。もう爲事をしてしまはなくては。○まあ、地獄は暗い所だこと。○まあ、殿様まあ、あなた軍人で入らつしやつて、そんな臆病な。誰かに知れたつて、わたくし共はこはがらなくたつて好うございますわ。わたくし共の權威を冒すことは誰にも出来ませんのでももの。○えい。あのお爺いさんの方の體に、こんなに血があらうとは、誰だつて思はなかつたのだわ。

醫師

どうです。今のをお聞ですか。

妃

あのファイフ候には奥さんがあつたのだが、あれはどこへ行きなすつたのだらう。○えい。此手はもうどうしても綺麗にはならないのかしら。○もうお廢なさいまし、殿様、もうお廢なさいまし。そんな所を見詰めてばかり入らつしやるご、みんな人に分かつてしまひますわ。

醫師

さても、さても。御存じなすつてはならない事を、御存じだと見えますね。

侍女

兎に角仰やつてならない事を仰やつたには違ございませんね。なんだか存じませんが、大變な事を御承知なすつて入らつしやるやうでございますね。

妃

ここの所はいつまでも血の臭にほひがしてゐるわ。アラビアに出来る丈の香料にほひものを皆持つて來ても、この小さい手の臭を消すことが出来ないのかしら。おう。おう。おう。

醫師

お妃のあの溜息をお聞なさい。お胸に大さうな重荷を負つて入らつしやるのですね。

侍女

わたくし體中からだぢゆうにどんな榮譽を受けることでも、お妃様のやうな胸にはなりたくございませぬわ。

醫師

なる程、なる程。

侍女

ほんに神様のお恵で好くおなり遊せば好うございますが。

醫師

どうもあの病氣はわたくしの技術では直りませんね。それはあんな風に夢中で起きて歩く人が、安穩に布団の上で死んだ例ためしはあるのですが。

妃

あなたのお手をお洗遊ばせ。そして夜のお召をお召遊ばせ。そんな蒼い顔ばかりして入らつしやつちや厭でございますわ。わたくしもう一遍申し上げますが、パンコオはもう埋めてあるのでございます。お墓の中から出て參る筈がございません。

醫師

ふん。そんな事まで。

妃

さあ休みませうね。休みませうね。誰やら戸を敲きますわ。さあ。さあ、入らつしやいまし。お手を引いて參りませう。いたした事はいたさない前にはなりませんわ。休み

ませうね。休ませうね。

(退場。)

醫師

これからすぐにお床にお這入になるのですか。

侍女

すぐに入らつしやいますの。

醫師

昨今妙な流言が廣まつてゐる。常ならぬ行は常ならぬ苦を生むものだ。毒を受けた靈は、

ともすれば己が秘密を龔の枕に訴へるものだ。

お妃には醫者よりは坊主がいり用らしい。○

あゝ。主よ。われ等罪人皆をお救下されい。○あなたはお妃に

お附申してお出。お怪我をなさるやうな物をお側に置かぬことになさい。

ちよいとでも目を放しては行けませんよ。そこでもうお別しませう。

あの方の御様子を見たので、頭がぼんやりして、目が翳んで來ました。

胸には思ふ事があつても、口には出されませんかからね。

侍女

そんならお休なさいまし。

(退場。)

第二場 ダンシネエ恩附近の地。

メンテイス、ケエスネス、アングス、レノツクス並に

兵卒旗鼓を列ねて登場。

メンテイス

イングランドの軍隊はもう近づいて来た。引率してゐるのは世子マルコムと、をぢ君シワアドと、あのマクダッフとの三人だ。敵愾の念が燃えてゐる。皆の胸にこたへる今度の戦争の動機は、世棄人をも血に餓ゑた益荒男にして、恐ろしい吶喊を起させずには置かぬのだから。

アングス

我々はあのバアナムの森の附近で

出逢ふやうにしよう。義軍はあそこを通るのだから。

ケエスネス

ドナルベン殿も兄君と一しよにゐられるかも知れぬなあ。

レノツクス

いや。あの方のゐられぬことは慥だ。己は従軍貴族の名簿を持つてゐる。あの方はゐられぬが、その中にシワアドの倅もゐれば、その外今度初陣をして男一匹の働を見せよう云ふ、まだ髭の無い若武者が澤山ゐる。

メンテイス

所であの暴君はごうしてゐる。

ケエスネス

あの大きなダンシネエンの高地に堅固な要塞を築いた。あれは氣が狂つてゐると云ふ人もある。併しひどく憎がつてをらぬ人は、勇ましい王者の怒だとも云つてゐる。兎に角あの人和を失つた兵團を軍紀の革帯で締め附けて行くことの出来ぬ丈は

疑を容れない。

アングス

今になつては暴君も、あの弑逆の隠慝が

自分の手にこびり附いてゐるのを感じるだらう。

時々刻々に起る叛亂があの人の不義を責めてゐる。

あの人に率ゐられてゐる士卒は只節制の下に屈してゐて、

心服してはゐない。今になつては暴君も、あの國王の稱號が、

丁度巨人の衣服を盗んで侏儒が身に纏つたやうに、

すぐ脱げさうになつてゐるのを感じるだらう。

メンテイス

さうだ。誰だつて

あの人を惱まされてゐる官能が、物におびえて物を見詰めてゐるのを

嘲ることは出来まい。あの人の中に舍つてゐる一切の性情は、
總てそこに舍つてゐるために、自分を咀つてゐるのだから。

ケエスネス

さあ、行進を起さう。

そして忠義を竭して好い筈の所へ往つて忠義を竭さうぢやないか。

我々のさして行く先は萬民の艱を直す良醫の所だ。

あの人に附いて我々は本國を蕩清するために、最後の一滴まで

我々の血を灑がうではないか。

レノツクス

なに。それ程の事でもなからう。

帝王の花を害して、悪草を朽ちさせるまでの事ぢや。

さあ、バアナムへ往かう。(行進しつゝ退場。)

マクベス

第三場 ダンシネエン。城内の一問。

マクベス王、醫師並に従者登場。

マクベス王

もう己に知らせをせんでも好い。逃げるなら皆逃がしてしまへ。
バアナムの森が動き出して、ダンシネエンの岡へ薄つて来るまでは、
己は恐怖には襲はれぬ。乳の香のするマルコムがなんぢや。
女子の腰から生れた男ぢやないか。人間一切の運命を知つてゐる、
あの靈共が己に告げた。「恐れるには及ばぬ。女子の腰から
生れた男が御身に勝つことは無い」と告げた。逃げる諸侯は

逃げるが好い。逃げてイングランドの柔弱な子弟に交れ。

己を左右する精神、己の懐抱する膽略は

疑惑のために衰へ、恐怖のためにをのきはせぬ。

(従者一人登場。)

悪魔にでも面を黒くして貰へ。乳色をして來をつたな。

その鷺鳥のやうな目附にはごこでなつた。

従者

凡そ一萬ばかりの。

マクベス王

鷺鳥でも來ると云ふのか。たはけ奴。

従者

敵軍が。

マクベス

二三七

マクベス王

往つて面でもこすつて、その臆病色の上塗をして来い。白百合色の

肝をした小童奴。敵軍だと。阿房が。

咀はれてをれ。貴様のその麻布のやうな頬は

臆病と云ふ奴の腹心の友だ。なんの敵軍だ。乳面奴。

従者

あのイングランドの軍隊でございます。

マクベス王

その面を引つ籠めろ。(従者退場。)

シイトン。あいつを見てゐると

胸が痞へて来る。○シイトンはをらんか。○此一舉で

己は永遠に枕を高うして眠られるか、倒されてしまふかちや。



己は生きてゐることは十分生きてゐた。己の生涯の道は

もう木葉凋落する肅殺の季節に入った。

そして晩年の道連になる筈の

榮譽、恩愛、柔順も、身を繞る朋友の群も、

己にはそれを獲る途が無い。これに反して己には

色に形れずに心に潜む呪咀が伴ふ。阿諛便佞が伴ふ。

それをみじめな己の胸は斥けたいのだが、斥けることが出来ぬ。○

シイトン。

(シイトン登場。)

シイトン

御用向は。

マクベス王

マクベス

何か其後聞き込んだか。

シイトン

これまで参つた報告は皆事實でございました。

マクベス王

そんなら己の骨から己の肉が削り取られるまで、己は闘ふ。

甲冑をよこせ。

シイトン

いえ。まだそれ程の事には及びますまい。

マクベス王

いや。己は着けてゐたい。○

もつと騎馬の者を出して、國內の巡察をさせい。

臆病な事を言ふものがあつたら絞首にさせい。○甲冑をよこせ。○

侍醫 病人はごうかな。

醫師

は。御病氣と申すよりは、

寧叢ねいそうり起る幻象げんさうに精神の安靜を

奪はれてお出になると云ふ工合で。

マクベス王

それを直して遣つてくれ。

お前は精神の錯亂を直す醫者にはなれんのか。

記憶の中に根を卸した愁を薙り除くのだ。

脳髓に刻み附けられた懼を削り取るのだ。

何か物を忘れさせるやうな緩和劑で、

心の臟しんを押さへ附けて危険な物を拂つて、

マクベス

痞へた胸を霽らして遣ふことは出来ぬか。

醫師

ごうもそれは御病人が

御自分でなさる外ございません。

マクベス王

そんなら薬は狗にでも投げて遣れ。己の役には丸で立たぬ。○

さあ、己に甲冑を着せてくれ。令の杖をよこせ。○

シートン。騎馬のものを出すのだぞ。○侍醫。諸侯が皆逃げるがなあ。○

早く着せんか。○侍醫。お前此國の

小水を検査して見て、病氣の診断をして、

昔の健康な状態に直してくれることが出来るぞ、

反響がお前の身の上に反つて来るやうに、



己が盛んに褒めて遣るがなあ。○それは脱すのだ。○

何か大黃だとか、センナだとか、そんな様な下劑で、

イングランドから来た外寇の掃除をしてくれんか。話は聞いただらうな。

醫師

は。防禦の御準備がありましたので、

わたくし共も承つてゐます。

マクベス王

それは跡から持つて来い。○

兎に角バアナムの森が動き出して、ダンシネエンへ寄せて来るまでは、

己は敗北をも滅亡をも恐れぬ。(醫師の外皆退場)

醫師

いや。旨くこのダンシネエンから逃げられたら、

謝禮位に引かれて又とは来ないぞ。(退場。)

第四場 ダンシネエン附近の地。森の遠景。

マルコム、老シワアド、其倅、マクダツフ、メンテイス、
グエスネス、アンガス、レノツクス、ロス、並に兵卒旗
鼓を列ねて行進しつつ登場。

マルコム

もう我々が安全な部屋に這入ることの出来る時期が、
目前に近づいて来たやうですね。

メンテイス

それは疑ふ餘地がありません。

シワアド

あの前に見えてゐるのはなんといふ森でせう。

メンテイス

あれがバアナムの森です。

マルコム

どの兵卒にもあの森の木を一枝つつ切らせて、
前に翳^{かき}して行かせい。さうすると我兵數を
隠すことが出来て、敵の斥候が
報告を誤るから。

兵卒等

承知いたしました。

シワアド

情報に據りますと、大膽な暴君は
ダンシネエンに停止してゐて、我軍の包圍に
こたへようとしてゐると云ふ丈の事です。

マルコム

さやう。主な望を

その陣地に繋けてゐるのです。なせと云ふに、機會のあり次第に、
上下共に叛亂を謀るのですから。
あれが部下には、脅迫せられた群として、心にも無い
勤務をするものより外ないのです。

マクダツフ

まあ、眞の成功で

公平な裁決が附くまで待つこととして、差當我々は専念に
軍人の本分を盡さうぢやありませんか。

シワアド

いかにも。これ丈が我々の所有で、

これ丈が我々の負債だと云ふことを軍神の至當な裁決で、
我々が知らせて貰ふ時期は迫つてゐます。
架空な想像は不確實な希望を語るに過ぎませぬ。
堅固な斷案は打物が下さんではならぬ。
さあ、戦闘を開始しませう。(行進しつゝ退場。)

第五場 ダンシネエン。城内。

マクベス

マクベス王、シイトン並に士卒等
旗鼓を列ねて登場。

マクベス王

城の外壁に我旗を立てえ。

まだ「敵が来る、来る」と云ふ叫聲ばかりがしてゐる。我堅壘は
包圍などを肩ものこづごもせぬ。饑渴と時疫とで皆殺になるまで
そこに駐屯させるが好い。身方になる筈の
内地の兵が加はつてゐぬぞ。

こつちも危険を冒して討つて出て、髯と髯とが觸れるまで
迫り合つて、國へ追ひ還して遣るのだが。

(奥より女子等の叫聲聞ゆ。)

あれはなんの騒か。

シイトン

あれは婦人方の聲でございます。(退場。)

マクベス王

己は恐怖と云ふ感じを殆ど忘れた。
此間中は夜の叫聲が耳に入つても
ぞつとした。氣味の悪い話でも聞くと、
肌の毛が生きた物のやうに、逆さかに立つてざわついた。
己は飽くまで恐怖に耽つてゐた。
氣味の悪いと云ふことも、己の殺伐な思想に親んだので、
今では己を魔おびえさせることが無い。

(シイトン再び登場。)

なんであんな聲を立てたのか。

シイトン

お妃がお隠かくれになりました。

マクベス王

もつと跡で死んでくれれば好いにな。

さう云ふ詞を聞いて好い時も来ただらうに。○

あすが来る。あすが来る。又あすが来る。

「時」は一日一日と刻足にゐざつて行つて、

記録の最終の一句まで行き着いて見ると、

その幾つかの「きのふ」は、悉く阿房あひらを塵ちり泥ひだなす

死滅しめつに導いた紙燭しそくの火に過ぎぬ。消えろ。短い蠟燭。

人生はよろめく影だ。氣の毒な俳優が



約束の時間丈舞臺で息張いばつて跳ね廻まわつたところで、

それが濟めば誰も耳を傾けるものは無い。馬鹿の口で

話す話が、仰山おんさんに物騒ものさわがしうても、

何の意義も無いのだ。○

(使一人登場。)

貴様舌を動かうごかしに來たのだな。さつさと言へ。

使

御前ごぜん。

わたくしが見たやうに存じます事を申し上げたうございますが、

どう申し上げて宜しいか。

マクベス王

宜しい。言つて見い。

マクベス

使

わたくしが高地の上に歩哨に立つてゐまして、
バアナムの方角を展望してゐますと、突然、どうも
あの森が動き出したやうで。

マクベス王

この嘘衝が。

使

もしさうでなかつたら、御氣色みけしきに觸れましても致方がございません。
あの三里の道を遣つて來るのを、御覧になれば分かります。
動く森でございます。

マクベス王

若し嘘を衝いたのだと、

生きながら貴様を手近な木の枝に吊つるし上げて、
腹が耗へつて干物になるまで置いて遣る。若し其話が本當だつたら、
貴様が己をその通にしても好い。○
己は元氣を引つ込ませねばならぬぞ。どうやらあの怨敵の
女子達の衝きいた真まことらしい嘘うその兩意りやういが
分わかり掛かかつて來た。「バアナムの森が動き出して、
ダンシネエンの岡せきに薄うすつて來るまで、恐おそれるなど云つたつけな。
その森が今ダンシネエンへ向かつて來る。○打物を取つて出る外無い。○
若し今の報告の通の事が現れたら、
もうここから退のかれもせぬ。ここにこたへてゐられもせぬ。
かうなれば此上日の目を見てゐるのも厭いとになる。
世界萬物の運行も崩壊してしまふが好い。○

襲撃の譜を奏させい。○暴風も吹き荒め。破滅も来い。
せめて甲を身に負うた儘死ぬるぢや。(退場)

第六場 同じ土地。城の前の平地。

マルコム、老シワアド、マクダツフ等、木の枝を
翳せる軍隊、旗鼓を列ねて登場。

マルコム

もうこれ程近くなれば好い。その生木の盾を棄て、
有の儘を敵に見せい。をち上。

あなたはわたくしの甥の御子息と御一しよに

第一線の攻撃に當つて下さい。マクダツフ殿と我々とは、
兼ての計畫の上で、跡に残つてゐる丈の
作戦に任じませう。

シワアド

そんなら暫時お別します。

我々が暴君の軍に日の暮れるまでに出逢ひさへいたしたら、
打ち破らんで置きません。我々は死を以て誓ひます。

マクダツフ

さあ、喇叭を一齊に吹奏せい。息の續く丈吹け。
流血と殺戮との賑やかな先觸だ。(退場)

第七場 平地の他の部分。鼓角の聲。

マクベス王登場。

マクベス王

癡おろかな戯くに、杖ぶに縛られた熊のやうに、己は此場を
追れることが出来ぬ。己は忍んでその熊の藝をせねばならぬ。
一體その女の腰から生れなんだ男は誰か。その男の外には
己の恐れる奴は一人も無いのだが。

(倅シワアド登場。)

倅シワアド

名告なれ。

マクベス王

名を聞いて慄え上がるな。

倅シワアド

なんの。地獄の惡鬼羅刹の名より恐ろしい、
火のやうな名にもせよ。

マクベス王

己の名はマクベスぢや。

倅シワアド

さては。此方このほうの耳にそれ程憎く響く名は
惡魔自身も名告るまい。

マクベス王

それ程こはくと云はぬか。

倅シワアド

マクベス

嘘ぢや。世に見限られた暴君。その嘘の皮を
此刀で剥いでくれる。

(二人闘ふ。伴シワアド殺さる。)

マクベス王

小童奴。女子の腰から生れをつたと見える。

女子の腰から生れた程の男が打ち込んで来る
刃を嘲り、打物を笑ふ己ぢや。(退場。○)

鼓角の聲。マクダツフ登場。)

マクダツフ

物音のするのはあつちぢやな。暴君はごっこにをる。顔を見せい。
己の一太刀を受けずにお主が死んだら、
己は永遠に妻子の亡霊に責められねばならぬ。

備はれて手に槍を取る尾籠なカアン共に
己の切尖は向けられぬ。お主に逢はいで。マクベス。
刃金も翻れぬ己の刀を、爲す事もなく徒らに
元の鞘に収められうか。あそこにお主はをらうな。
あの仰山な物音は大將株の何者かがゐる徴ぢや。
運命の女神。己をあの男に逢はせてくれい。
その上の望は己には無いのぢや。(退場。呐喊の聲。○)

マルコムと老シワアドと登場。)

老シワアド

殿下。此道をお出なされい。城は抗抵せずには落ちました。
暴君の部下は二つに割れて、半は身方に附いて闘つてゐます。
諸侯は身方に附いて功名を勵んでゐます。

マクベス

今日の軍は大かた殿下の勝に極まりました。
爲事はあられました片附きました。

マルコム

いかにも身方に附いて

働いてゐる敵を我々も見ました。

老シワアド

さあ、御入城なさりませい。

(退場。呐喊の聲。)

第八場 平地の他の部分。

マクベス王登場。

マクベス王

何もロオマの癡者の真似をして、我ご我刃に
身を殺すにも及ぶまい。それよりは當るを幸
切りまくつてくれう。

(マクダツフ登場。)

マクダツフ

返せ。地獄の門守る犬。返せ。

マクベス王

己は誰よりもお主に逢ひたうなかつた。
ごうぞ引いてくれ。お主が一族の血が、もう己の靈の
重荷になつてをる。

マクベス

マクダツフ

いや。己はお主に言ふ詞が無い。

己の聲は己の刃だ。言はうやうのない、
血腥い人非人奴。

(二人刃を交ふ。)

マクベス王

無駄骨を折るな。

お主が打つ太刀で、切られぬ風は切れもせうが、
己の血を流すことは出来ぬ。

同じ打つなら、刃物で切れる脳天を打て。

己は魔法でなつた不仁身ぢや。女子の腰から生れた男に
傷けられる己では無い。

マクダツフ

おう。其魔法は思ひ切れ。

お主の仕へる天使の口からしつかり聴けよ。このマクダツフは
月の満たぬに、母の腹から
切り出された子ぢや。

マクベス王

や。それをほざくその舌を己は咀ふ。

己の性根の男らしい半分がその一言で挫かれた。
兩意の舌で人を欺く

まやかしの魔女共をばもう恃まぬ。

耳に約束の詞を聞せて、「望」に變換の
迷惑を掛ける。もうお主と刃は交へぬ。

マクダツフ

そんなら降参せい。臆病者。

世の見せものになつて生きてをれ。

珍らしい異形のものやうに、柱にかいた

畫姿の下に、「稀代の暴君を御覽あれ」と

札書ふたがきをして見せて遣る。

マクベス王

いや。降参はせぬ。

生若なまわかいマルコムが脚下の土に口附くちつけして、

下民げみんの咀を受けたうは無い。

よしやバアナムの森がダンシネエンの岡へ寄せて來ても、

女子の腰から生れぬお主が己の相手に現れても、

言観

己は最後の運うんだめし験をする。身を棄てる前に、

己は此楯を棄てる。さあ、來い。マクダツフ。

「待て」と聲を掛けたものは、甘んじて咀はれうぞ。

(二人闘ひつゝ、退場。鼓角の聲)

○旋軍の譟。鼓。マルコム、老シワアド、ロス、

其他の諸侯並に士卒、旗鼓を列ねて登場。)

マルコム

ここに見えぬ戦友達が無事で歸つて來れば好いが。

老シワアド

いや。多少の戦死者はある筈です。でもわたくしが思ふには、

これ程の大勝利は先づ廉價に贏ち得たと申すもので。

マルコム

マクベス

まだマクダツフが見えぬ。それに御子息が。

ロス

いや。シワアド殿の御子息は軍人の責を果されました。所詮男になられるまでのお命でした。

敵に向かつて一步も引かず、

天晴勇士の力量を見せられたと思ふ間もなく、

その儘勇士の御最期を。

老シワアド

おう。討たれましたか。

ロス

は。御遺骸はもう戦場から取り片付けさせました。

比類の無い御武功で見れば、お惜をしになる

立派な戦死をなされたご申す丈ではござりませぬ。

老シワアド

向創でしたかな。

ロス

は。創は額で。

老シワアド

そんなら主しゆの御軍人みいくさびとぢや。

よしやわたしに髪かみの毛けの數程かずほどの伴ともがあつても、

わたしはそれより美しい死しは願ねがはぬ。

これがあるへの回向くわうの鐘かねぢや。

マルコム

マクベス

をち上のお歎は

物足らぬ。わたしが代に泣いて遣る。

老シワアド

いや。十分ぢや。

お話で見れば、見苦しくない死様で、負債は残さぬ。

それで好い。跡は主のまにまにぢや。あ。そこに新しい慰藉が。

(マクベスの首級を持ちてマクダツフ再び登場。)

マクダツフ

國王陛下の萬歳をお祝し申します。もう國王でお出なさる。

篡立者の咀はれた首を御覽なされい。國難は拯はれました。

わたくしには陛下がもう儀仗を備へてお出になるやうに見えます。

わたくしは皆に代つてお祝詞を申し上げます。

さあ、いづれも、御一しよに「陛下萬歳」を
唱へませう。

マクダツフ

同

陛下萬歳。(鼓。)

マルコム

いや。人々の盡された友誼に酬いて、
わたしの志を果すには、

格別手間は掛かりません。一族の人々にも諸侯達にも、

今後最高の爵を名告らせます。これはスコットランドで

初めて制定する名譽の稱號です。

此上漸次に執行しなくてはならぬ事は、

苛察な悪政の罊を避けて、
 外國に流浪した同志の人々を呼び還すのが一つ。
 滅亡したあの偽朝の王と、察する所、自ら非命の死を
 遂げたらしい、あの悪魔のやうな妃きさきとに仕へた、
 残酷な役人を法廷に召喚するのが二つ。
 その外わたしの手に待つことある、緊要な事件は
 まだ幾らもありませうが、それは天祐が此身に加はるなら、
 その時その場所で程好く處理して行くことませう。
 謹んで一同にも、又各位別々にも感謝します。
 どうぞ一同スコオンの即位式に參列なすつて下されい。

(鼓。退場。○
 終。)

人物

ダンカン、スコットランド王
 マルコム
 ドナルベン
 マクベス、王軍の將官、後に王
 バンコオ、王軍の將官
 フリアンス、バンコオの子
 マクダツフ
 レノツクス
 ロス
 メンテイス
 スコットランドの貴人

マクベス

Duncan
 Malcolm
 Donalbain
 Macbeth
 Banquo
 Fleance
 Macduff
 Lennox
 Ross
 Menteth

人物

二七二

アンガス

Angus

ケエスネス

Cathness

シワアド、ノオサンバアランド侯、イングランド軍の將官

Siward

倅シワアド、ノオサンバアランド侯の子

Young Siward

マクダツフの倅

Son to Macduff

シイトン、王に隨從せる一士官

Seyton

イングランドの醫師

スコットランドの醫師

兵卒

門番

翁

マクベス夫人、後に妃

Lady Macbeth

マクダツフ夫人

Lady Macduff

侍女、妃に奉侍せるもの

ヘカテ

魔女三人

貴公子、侍臣、將校、兵卒、刺客、從者、使

バンコオの靈、其他の幻像

場所

第四幕の末はイングランド、其他總てスコットランド



附 録

來ませ來ませの歌

第三幕第五場

來ませ。來ませ。虚空に來ませ。
へカテ。へカテ。虚空に來ませ。

へカテ

往かうよ。往かうよ。往かうよ。
及ばむ限り疾く。

今ぞ行く。今ぞ飛ぶ。

マクベス



附録

愛しき靈、黒女と我と。

甘き樂しきにもあるかな。

月明く照る夜、

歌ひつ、舞ひつ、戯れつ、口附しつ、

風に乗りて行くは。

木立、大岩、山の上を、

湖、暗き泉の上を、

高き、低き塔の上を、

靈等の群に交りて、夜はに飛ぶは。

鐘の音も狗、狼の啼く聲も

我等の耳には聞えず。



水音も筒の響も
高き空には戻らず。

黒き靈等の歌

第四幕第一場

黒き靈等に白き靈等、

赤き靈等に鈍色の靈等、

交れ。交れ。交れ。

汝等の交られむ限。

不許複製

大正二年七月廿五日印刷
大正二年七月廿八日發行

定價壹圓參拾錢

譯者 森 林 太 郎

發行者 福 永 文 之 助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 佐 藤 保 太 郎
東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地

印刷所 文 祥 堂 印 刷 所
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行所 警 醒 社 書 店
振替東京五五三(電話新橋一五八七)



1-2852

5

~~scribble~~

38

338

202

終

